



想 いを 繋 ぐ

木のある風景は、わたしたちの慌ただしい日常の中に安らぎと温もりを与えてくれます。しかし時として強風による倒木や、日当たりの妨げになったりと私たちの生活に災いをもたらす存在ともなってしまう。

「本来ならば残したい」けれどやむを得ず伐採しなければならない。そんな想い入れのある大切な木を“生かして”“繋げる”。そんな新しい伐採業の姿がここにあります。

木を生かし、木と共に歩む
飯島ツリーサービス

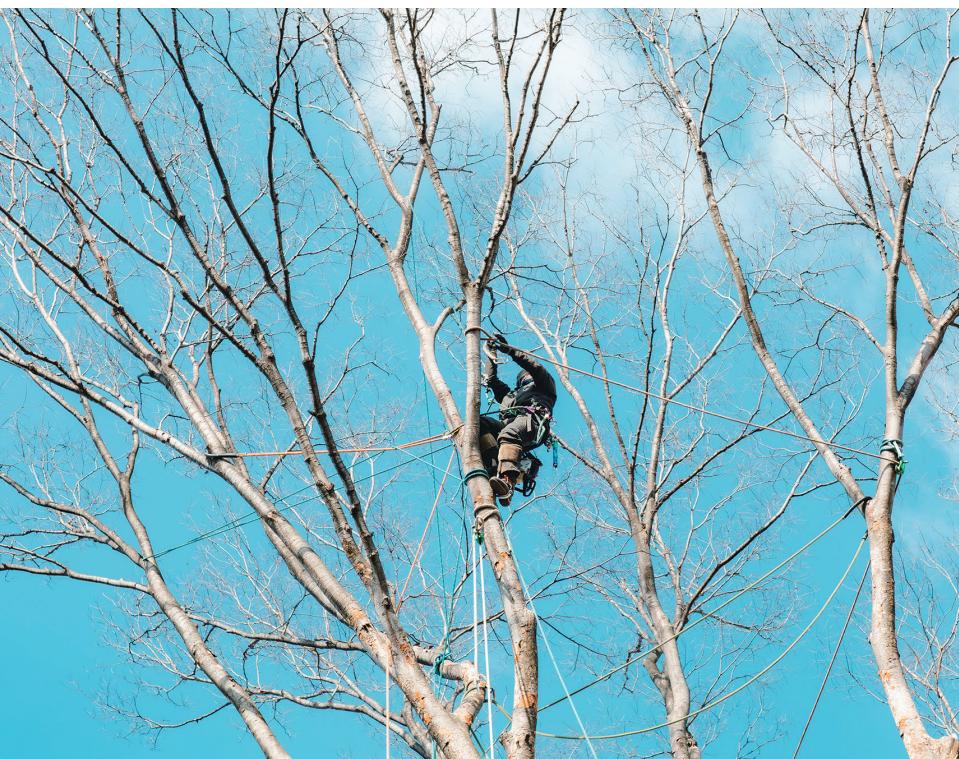


飯島ソリーサービスが目指す新しい伐採の形

#3

“やむを得ず”伐らなければならぬ

「山林を手入れしていい木材にするために育成などを行う林業に対して、僕たち伐採業は少しネガティブな理由で木を伐ることが多いんです。」そう話す飯島氏。ずっと一緒に過ごしてきた庭木でも時として危険や支障となってしまう場合、人はその木を伐る選択をとらざるを得ません。一般的に伐採した木の多くはコストをかけて処分しなければならず、それを負担するのは依頼者。「その人にとって思い入れがある木をただ伐るだけでは忍びない。どうせなら何かの形で依頼者にお返しできる方法がないか。」そんなジレンマの中で飯島氏がたどりついたのが「木を生かす」今の取り組みなのでした。



#4

木を生かす、木とともに歩む

「価値のある木を有効に再利用してくれる人を探し始めたんです。木工作家さんや薪屋さんのもとへ自ら足をはこびました。」そうした飯島氏の行動力と想いに共感し、地元の薪屋さんや県外で活動する木工作家など徐々にその輪は広がりを見せます。「それぞれのメリットを考えて、伐採した木が生かされる形を作りたかった。その中で出来上がった作品を依頼者にお返しして喜んでもらいたいんです。」伐採された木がともに生活を歩んでいくものに形を変える。伐採木から作られる器やぐい呑みはこうして生まれました。「僕たちの仕事は生きた木を伐ることなんです。」そう話す飯島氏。自然環境との向き合い方が注目される現在において、伐採業の役割はどうあるべきなのか、最後にこう語りました。「伐採業は依頼があれば木を伐る仕事。僕が考える“木を生かす”というのは、“それのかたちで木を生かす”ということなんです。」



#1

“伐採業”の在り方

“伐採”と聞くと荒れた山林を整備するために間伐などの印象をもつ人が多いのかもしれません。しかし実際の伐採現場は「木が邪魔で日が当たらないから」「倒木すると危険だから」といった理由の依頼が多いといいます。「自分の仕事は林業ではなくて“伐採業”なんです。」そう話す飯島ツリーサービス代表の飯島氏は自然環境との共存がとりだされている現在、林業や造園業とはまた違う“伐採”というものの在り方について常に自問自答を繰り返していました。



#2

もともと木に興味があつた訳ではないんです

飯島ツリーサービスとして独立する前には山林でスギやヒノキの伐採をしていたという飯島氏。「林業の中で伐採する木を“雑つ木”と言っていたんです。どんな木なのかかも知らずにスギやヒノキ林をいい木に育てるためにただ伐採をしていました。」後に独立を果たしてから、何気なく伐採していた木の価値に気付かされたといいます。「ある現場で伐ったケヤキを原木市場に出品したらかなりの価値が付いて驚いたんです。ただ伐っていた木にもそれぞれの魅力や用途があるんだと。」それ以来自身でも木の勉強をする中で木の魅力に引き込まれていったといいます。ただ処分するのではなく、適した場所に繋げる飯島ツリーサービスの活動がそこからはじまりました。

Yosuke Iijima



木と
共に歩
き生かし、
歩む

飯島ツリーサービスでは
想いを繋ぐことを大切に、
伐採したお客様の木を
器・ぐい呑み・薪・ボールペン・花器などに加工して
お返しする取り組みを続けています。
その裏には
飯島ツリーサービスの理念に共感し
力を貸す人たちと、
広がり続ける循環の輪がありました。



“思い立つたらすぐ行動” なんですよ 飯島さんは

「ある日突然飯島さんから連絡がきたんです。雑誌に掲載されている僕のランプシェードを見て連絡をくれました。」そう話すのは静岡県富士宮市で活動する木工作家の中矢嘉貴氏。飯島ツリーサービスに協力する木工作家の一人です。水分を含んだ「生木」の木材から作られるランプシェードや器は、乾燥の過程で味わい深い予測不可能な造形美を生み出します。中矢氏が独立してすぐ、材料がなく仕入れに困っていた時に二人は出会いました。「伐採したばかりの生木をもらえるのはありがたい限りなんです」と話すその裏には、中矢氏と飯島ツリーサービス、両者を繋ぐ想いがあります。



木工との出会い

「元々は大阪の設計会社で図面ばかり書いていました。」「何かを作る」ことが昔から好きだったこともあり入社した設計会社で図面制作に明け暮れる中で徐々に感じ始めた“違和感”。そんな時たまたま手にしたのが木工雑誌でした。「自分の手で物を作りたかった。それで木工の世界に興味が湧きました。」その後一念発起して向かったのは岐阜県中津川の家庭用木工製品制作の会社でした。「制作ではなく、任されたのは配送や在庫管理の仕事だったんです。」なかなか木工の技術を学べないという事で、同県高山市にある木工塾へ入塾を決心しました。主催する会社の製品を制作しながら2年間木工を学び、そのままその会社へ就職する運びとなります。

日本の山をよくしよう

入社して5年程経った頃、中矢氏はいよいよ独立することになります。当時結婚した妻の地元静岡県富士宮市へと活動の場を移し、しばらくは乾燥木材を用いた木工製作に取り組んでいましたが、それを聞きました近所の人たちから「庭木や倒木を切ったので使うか」という話が徐々に舞い込むように。独立して2年程した頃には代表作である“ランプシェード”的構想は浮かんでいつつも、まだそうした生木を活かした製法を習得していなかったため、とある木工作家から教えを請うことにしました。「“生木を活かす”制法で創作活動をしている方で、“日本の森の木を使う”“日本の山をよくする”という理念に強く共感したんです。」その後本格的に“ランプシェード”的製作が始まります。



木と使う人を繋げる架け橋となる

ランプシェードをきっかけに飯島ツリーサービスから提供される伐採木を用いた器制作がはじまります。依頼者の想いが詰まっている伐採木は、新しい形に生まれ変わり持ち主のもとへと還っていきます。「作家は独りよがりにならずに使う人の需要に答えていかなければならないんです。」そう話す中矢氏。放置されてしまうか、処分されてしまう木材に新たな価値を吹き込み、使う人に繋げる架け橋となる。飯島ツリーサービスとの縁によって中矢氏の木工の形は進化を遂げていきます。「こうした循環が広がっていけば日本の山はどんどんよくなる。飯島さんの周りにはそんな輪が広がっているんだと思います。」伐採・制作・使い手、それぞれにメリットをもたらすこの健康な循環が、これから日本の山を守っていくかもしれません。



Yoshitaka Nakaya

飯島さんは木の “ソムリエ”のような存在なんです

「伐採木を適した場所に振り分けるということは、飯島さんのように木の価値を理解している人でないと無理だと思います。」そう話すのは木工作家の河村有軌氏。愛知県一宮市で活動する木工作家河村寿昌氏の子息で、轆轤ろくろを用いた制法で創作活動に励んでいます。

その作品の一つである“ぐい呑み”が飯島ツリーサービスと有軌氏を繋げます。そこには柔軟かつストイックに制作と向き合う反面、「ただ木が好きなんです」とあどけない笑顔を見せる若手木工作家の姿がありました。



これまでの“学び”的日々

「高校卒業の時にやりたいことが無く、30歳ぐらいまでは父に従って色々経験してみようと思いました。」有軌氏はその言葉通りこれまで父寿昌氏に抗う事なく修練を重ねてきました。高校を卒業してまず初めの転地は石川県。「初めての一人暮らしで辛い時もありましたが、自分で働きながら毎日轆轤ろくろの勉強をしました。」2年ほど経つと富山県のとある製材所へ。現場で販売の仕事をしながら木のことを学び、程なくして静岡県にある仏具製造会社へ移ります。「仏具や家具の制作を学びつつ、100万円の資金を貯めて沖縄へ行くよう父から言われていました。」沖縄に自生する木は本州の木と全く毛色が異なる上にほとんど流通していないこと。そういう珍しい木を集めてくるというのも沖縄へ向かう目的の一つでした。

楽しんで木と向き合う

次々と言い渡される父からの課題に応え続ける日々。それを支え突き動かしてきたのは「楽しんで木と向き合う」有軌氏の姿勢でした。「自分じゃなにが良くて何が悪いかわからない、でも僕は木が好きでこの仕事を楽しんでいる。ただ言いなりになっている訳ではないんです。」父を敬いながらも、確実に自身の手応えとスタイルを捉えはじめた若手木工作家がそこになりました。良い意味で作家であることに執着をせずに製品の利便性にこだわる父寿昌氏の姿に有軌氏も学ぶことが多いと言います。「自分の作品のファンを掴みたいのではなく、作品が買い手の需要にしっかりと応えられているクオリティであるかを追求したいんです。」



作家河村有軌を育む環境

ある日工房へ“伐採木を再利用したい”と飯島氏が訪ねてきたのが出会いのきっかけでした。そこで父寿昌氏はその制作を有軌氏に託します。「折角の機会だから僕に任せたいという父の提案に快く応じてくれました。依頼者の想いに応えるよう責任をもって制作する環境を与えてもらえることに本当に感謝しています。」自身に寄せられる要求や課題に対して“すべて勉強”という意識で真摯に取り組む有軌氏。「とりあえずやってみる、やりきってみることが大事だと思っています。作品に対して“こんなものでいいか”とは絶対になりたくないんです。」置かれている環境に順応しながらも、自身の根幹はぶれさせない。飯島ツリーサービスとの関係がそんな有軌氏のしなやかな成長の後押しをしているのかもしれません。



Yuki Kawamura



とにかく義理堅くて 面倒見がいいんですよ飯島さんは

「いつも何かと僕のことを気にかけてくれて、“何とかならないか”という相談に必ず応えてくれるんです。」そう話すのは山梨県南アルプス市にある社会福祉法人さかき会「みらいコンパニー」所長の横内幹氏。障害福祉サービス事業の一環として、13年前から行っている薪の製造が飯島ツリーサービスとの接点でした。「丁度飯島さんが独立して起業したばかりのタイミングでした。」処分してしまう伐採木を再利用してほしいという依頼に新しい“伐採業”的感を感じたという横内氏。こうして始まった二人の交流は、今や互いに信頼しあうビジネスパートナーとまで関係を深めることになるのでした。

“先駆的”で“人間臭い”飯島ツリーサービス

林業は比較的古い業界で、WEBサイトや業者の情報があまり出回っていないのが実情。「前時代的な林業の業界から独立し、伐採木の再利用やネットツールなどを積極的に取り入れていく先駆的な姿勢に強く感心しました。」と話す横内氏。また両者の出会いは、キャンプブームや薪ストーブユーザーの増加に伴う材料供給に悩んでいたタイミングでもあったといいます。「新たに林業者と繋がるのが難しいと相談すると知り合いの業者も快く紹介してくれたんです。」先駆的でありながら、情に厚く“繋がり”を大切にする飯島ツリーサービスの人柄に、「自分もお返ししたい」と思うようになったと横内氏は語ります。



“補い合い、高め合う”二人の関係

「5、6年前ぐらいから交流がはじまり、今では互いに業者やお客様を紹介し合うようになりました。」近年では紹介を受けた伐採現場に赴き、その場で薪の加工・納品をしたり、逆に薪の納品時に伐採の需要があれば飯島ツリーサービスを紹介したりと、両者のメリットを考えた業務提携の形が成り立っています。またこうした活発な営みが、「みらいコンパニー」利用者にも良い影響を与えているのだと言います。「長年部屋に閉じこもっていた男の子が、木や自然に触れたことで表情や言葉が凄く前向きになったんです。“木”的もたらす影響にさらなる可能性を感じています。」



自分をアップデートし続ける

自分で作ったものが喜んでもらえるという実感が利用者たちのやりがいに繋がっていました。「薪を通して新しい自分に変わろうとする利用者さんを見てると心が動かされるんです。」木の加工だけでなく、新たに植林にも取り組んでいこうと今後の展望を話す横内氏。「飯島さんも本来はアナログな人だと思う。でも常に勉強して、行動を起こして自分の成長に挑んでいる。そんな姿に僕も刺激を受けています。」強く刺激を受けながら成長を続ける二人の関係は、今後なお一層深く深いものになっていくのでしょうか。





こんなお悩みはありませんか？



- 木が大きくなつて困る**
- 枯れ枝や落葉が屋根や樋に落ちて困る**
- 台風などで倒木が心配**
- 木があり富士山や湖などの景色を妨げる**
- 高い木があり太陽を妨げ暗くて寒い**

小さな庭木1本から神社などの大木まで伐採いたします。

クレーンや高所作業車が入らない狭い場所や急傾斜地でも、

安全を第一に考え、費用負担のかからない最適な方法で作業いたします。

木のことでお困りになりましたら、まずはお気軽にご相談ください

木を生かし、木と共に歩む



飯島ツリーサービス

〒409-2413 山梨県南巨摩郡身延町和田2099-1

☎ 0556-62-0042

(電話に出られないこともありますが必ず折り返しご連絡します)

不定休／AM7:30～PM19:00

無料お見積りやご相談は
QRコードをスキャン▶

または▶

飯島ツリーサービス

検索



facebookもチェック



飯島ツリーサービス